

# いのちの水

二〇二二年 五月号 第七三五号

知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる。

(Iコリント8の1より)

## 目次

- ・ 私たちにできること 1
- ・ 御国が来ますように 3
- ・ 弱きところにあらわれる神の力 4
- ・ 死を前にした人を支えるもの  
ドイツ戦没学生の手紙から9
- ・ 主日礼拝 5分間メッセージ  
から、歩んだ道 (自己紹介) 13



私たちにできる大切なこと

現在のような、ロシアとウクライナとの戦争にあつて、私たちに何ができるのか、と思いまどう人達も多い。そもそも、このような状況でなくとも、ごく身近な人が死に至る病で日々苦しんでいる人、あるいは難病がつり、医学でもどうすることもできないままに、次第に筋肉が働かなくなり、最終的には言葉も発せられず、自分の苦しいところなども伝えることもできない状況となり、苦しみつづ死に至るといふ人達もいる。

また、医療過誤で重篤な障

がい者となつてしまった人、あるいは事故や災害、犯罪などによりまきこまれ、大怪我をしたり、家族をなくした人、飢えて苦しむ7億人ほどの人達、さらには、日本でも戦争はなくとも、毎年2万人を越える人達が自らの命を断つている。こうした苦しく絶えがたい状況にある方々は、いつの時代にも、戦争がなくとも、絶えることがない。そのような人達に何ができるのかーと思つてもたいはいはいろいろな制約があるために、何もできない。しかし、どのような状況にあつても、私たちにできる

大切なことがある。

それが、祈りである。

そして、人間に対する祈りのうちで、とくに心に残るのが、主イエスの次の言葉である。

：敵を愛し、  
迫害するもののために祈れ。

しかし、こんなことはできないはずがない、と一蹴する人が大多数ではないかと思われる。

けれども、聖書の記述には、並行法という表現が詩篇やイザヤ書などに含まれる詩には多く見られる。

例えば、詩篇の最初の第一篇にもそれははつきりとしている。

：悪しきものの計らいに歩まず

罪ある者の道にとどまらず

この二行は、ほぼ同じことを言い換えたものである。

…主の教えを愛し  
その教えを昼も夜も口ずさむ

この二行もほぼ同じことを言い換えたものである。

また次ぎのような詩も同様である。

…死の国に行けば、だれもあなたの名を言わず  
陰府に入れば、誰もあなたに感謝を捧げない。(詩篇5の6)

このような例は実に多いのであって、それを知れば、イエスの言葉もそうした並行法によって同じことを言い換えているのだということがわかる。

すなわち、

「敵を愛せよ」、ということと、「迫害する者のために祈れ」

ということは同じことを言い換えたにすぎない。

…ここで、敵を愛するとは、例えば異性を愛するとか、わが子を愛するというような意味とは全くことなる。

好きになる、とか、心惹かれるとかいうことではなく、相手の人の魂がよくなるようにと、最善のことが起こるようにと祈ることにほかならない。

敵対する人の心から、その悪意が除かれますように、と祈ることがその人を愛することなのである。これは、その人を好きになるとかいうこととは根本的に異なることである。

好きとか嫌いとかいう次元でなく、その人の運命がよ

くなるようにとの祈りの心だからである。

ある人が悪意で何か悪しきことをする、もしその人の心から悪意が除かれ、そこに神の愛の力が注がれるなら、その人も最善の状態へと向うのであるから、心に真の喜びが生じるであろうし、周囲の人も悪意をぶつけられることもなく、幸いな気持ちになる。

イエスが言われた意味を正しく受けとるならば、現在の状況にあつて、ロシアのプーチン大統領のような人物を一般的な意味で、愛するとか、好きになれ、などということではないのは容易にわかる。

もしプーチンの魂にその冷酷さや偽りの心が除かれ、神のお心の一しずくが注がれるならば、あのような戦争はただちに止めるであろう。

う。

あのようなひどいことを命じるということは、その魂のなかに冷たい石のような心があるからできるのであって、その石の心が除かれるならば、本人も周囲の人達も、また戦争も終わって、だれにとつてもよきことになる。

そうしたことになるように、彼の心に聖霊が吹き込むように、いのちの水が注がれるようにと祈ることが彼を愛するということであつて、それならば、本来キリスト者ならだれでも可能なはずである。

…こうした、神様の真実や愛がだれかの心に与えられますように、という祈りこそ、主イエスが「主の祈り」で与えた「御国が来ますように」であつた。

それゆえ、敵を愛し、迫害

するもののために祈ろうとする心は、御国を来させたまえ、と祈る心と同じなものである。

### 御国が来ますように

この祈りこそは、聖書全体を一貫して流れている祈りである。

ここで言われている「御国」とは何か。「御」は、神のような尊敬すべきものに対して付ける言葉(接頭語)であり、神の国が来ますように、ということである。神の国とは何か。

そのためには、「国」と訳された元の言葉(ギリシヤ語)は何だろうか。国という漢字は本来は中国語であり、現在も中国で用いられている言葉であり、そのまま日本に入って用いられている。この漢字は、その字

の形が囲いを意味していて、武力で守る領域という意味をもっている。国の旧字体

國の内部の文字は、戈(ほこ)を意味している。

しかし、聖書における「国」は、単なる領域ではない。

ギリシヤ語では、バシレイアというが、その元になっている言葉は、バシレウスであり、これは「王」という意味。それゆえに国と訳される原語のバシレイアは、(王)の権威、力、支配という意味である。その支配が及んでいる領域というこ

とで、王国 という意味にも用いられる。じつさい、聖書には、このバシレイアは、国、支配と訳されている。英語でも、kingdom であり、王(king)の支配する領域という意味を持つている。dom は抽象化する接尾語であるから、

王の支配する領域という意味になる。

それゆえに、御国が来ますようにとは、神の国が来ますように、であり、それは神の王としての力、愛と真実による支配が来ますようにという祈りになる。

しかし、「支配」という日本語は、私たちにとつて好ましいイメージを持ってはいない。

それは辞書にも、支配の類語として、専制、君臨、牛耳る、独裁などが挙げられていることからもうかがえる。

王の支配、信長や徳川などの支配、かつての天皇の現人神としての支配ーなど、だれが好ましいニュアンスだと感じるだろうか。

このように、原語を日本語にすると、本来の意味はニュアンスが変化してしまうの

がいろいろと見られるが、この主の祈りの重要な言葉も、日本語にするともとの意味が不十分となってくる。

「神の支配」といつても人間の支配のような専制的支配ではなく、愛と真実、そして正義による働き(支配)のことである。

言い換えれば、「御国が来ますように」とは、神の愛と真実、清いもの、美しく正義であるそのような力が私たちの心にも、また人間社会にも来ますように、そして権力者の心の中にも来ますようにとの祈りである。

敵意や憎しみのあるところに、神の愛が注がれて、その愛によってそうした暗い感情がなくなりますように、という祈りである。

さまざまの私たちのかかえる問題やこの社会、世界が直面している難問は、みな

不正やあざむき、不信実、欲望、妬み、自分が上に立ちたいという支配欲：等々が、もとにある。それらは人間的なものの、闇の力が支配しているからである。そうしたまちがった心の思いを罪といっている。それゆえに、聖書では人間は罪に支配されている、と記している。

それを、神の真実な力による支配によってその罪の支配の力を滅ぼしてくださいーという祈りとなる。

病になっても、事故、災害なども含め、いつさいのそうした苦しみや悲しみ、また人間関係の問題も、その究極的な解決は、人間を超えた神の真実な力が働くことによる。言い換えると、神の真実な愛の御支配によって解決される。

それゆえに、御国が来ます

ようにーとの祈りこそは、全能の神の御支配により、いつさいのこの世の問題の究極的解決を願う祈りである。

家族同士の難しい問題も、

そこに神の国が来るならば解決される。自分の心のさまさまの汚れ、自分中心の発想、思いなども、そこに神の力ーその愛の御支配が来ることによってそのような思い、罪が赦され、悪の力が追い出される。

御国が来ますように、との

祈りこそは、現在のウクライナとロシア、そしてウクライナに加担する欧米も加わっての戦争にあっても、そのそれぞれの国々の人々、そして大統領や首相たちの心のうちに、神の愛と真実が注がれ、彼らが自分の権力や他国を攻撃するような心が鎮められるようにとの

祈りであり、根本的な解決の道への祈りなのである。

弱きところにあらわされる神の力

(2022年5月1日 主日礼拝講話より。聖書箇所 ヨハネ四・13-10 参加者53名 オンライン集会(スカイプ))

：イエスは、サマリアの町に来られた。そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。

サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。

ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。イエスは答えて言われた。

「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。(ヨハネ福音書4の5-10より)」

この箇所は、イエスが、サマリアの女に、「生きた水」、永遠の命の水のことを告げるところで、よく知られた箇所である。

「生きた水」については次の述べることにして、今日は、その中から、とくに、弱さの中の力ということ学びたい。

「イエスが旅に疲れた。」とある。イエスは疲れるの

である。イエスは神の子として驚くべき力がある。ペテロが剣を抜いたとき、わたしが呼んだら天の軍団を呼べると言われた。イエスは死人をよみがえらせ、盲人の目を開け、海の上を歩くことができた。

そのような神の力を与えられていたのであるから、いかに長距離を歩こうが疲れることのない力があると思われる。

しかし、イエスは「疲れた」と記されている。この言葉は「コピアオー」という言葉であるが、私たちが通常ちよっとしたことを使う「疲れる」というのとは、異なる強い意味を持った言葉である。

「疲れた」と訳された原語は、κοπιᾶω (コピアオー) であり、その意味は、work hard, toil, strive,

struggle (懸命にはたらく、努力する、苦闘する) などと訳される言葉である。この言葉は別の箇所では以下のように「疲れ果て、労苦」などのように、私たちが生活の中で使うような軽い意味とは異なるのがわかる。

・私は私の嘆きで疲れ果て、私の涙で、夜ごとに私の寝床を漂わせ (詩篇 6:6)  
 ・私は主に叫んで疲れ果て、のどが渇き、私の目は、わが神を待ちわびて、衰え果てました (詩篇 69:3)

・あなたは、道の遠いゆえに、疲れ果てる You grew weary from your many wanderings, (イザヤ 57:10)

・わたしは、あなたがたをつかわして、あなたがたが

そのために労苦しなかったものを刈りとらせた。ほかの人々が労苦し、あなたがたは、彼らの労苦の実にあずかっているのである」 (ヨハネ 4の38)

・あなた方のために非常に労苦したマリアによるしく (ローマ 16の6)

・私たちは、今まで、飢え、渇き、着るものもなく、虐待され、労苦して働いている。(1コリント 4の13)

これらの聖書における用法を見ても、このコピアオーという言葉は、単なる疲れた、という程度のものでなく、その「労苦」は、命がけであり大変な苦しみを伴うものであった。

ローマの信徒への手紙の最後の部分に記されている

多くのパウロを助けた人物の記述がある中で用いられているのが、やはりこの言葉である。

迫害の中、歩いていく、何があるかわからない。しかし命がけで尽くした女性たちがいいた。

数々の労苦、それは日常の疲れではなく、殺されるかもしれない労苦である。

飢え渇き、虐待、そのことを労苦というこの言葉が使われている。

道の遠い、さまざま続けた疲れ。昔のパレスチナの旅は、多くは乾燥地帯であつて雨がふらず、雲もない空から太陽が照りつけるので、地面が熱で熱くなりその旅の疲れは非常なものであつたであろう。日本のような至るところに樹木があり、

日陰があり、飲み水が流れているところでは想像もで

きない旅の困難があった。

イエスは、体力を消耗し  
 疲れたー主は、このような  
 人間としての弱さを持たれ  
 ていた。それでありながら、  
 神と同じ力を持たれていた。

神であり、しかも人の弱さ  
 をも持っておられた方であ  
 り、地上で生きた人間のう  
 ち最も神秘に満ちた存在で  
 あった。そして、その疲れ  
 た中でサマリアの女性に、  
 水を飲みたいと頼むほどで  
 あった。

疲れたそのもっとも弱い中  
 に不思議な力がイエスには  
 あった。そして、初めて会っ  
 たサマリアの女性のその過  
 去のことをすべてわかる霊  
 的な洞察力、そして真理を  
 伝える力。それは衰えるこ  
 とがなかった。

人間には弱さがある。人間  
 のどうしようもない弱さ、  
 聖書では、いかに優れた人

であつてもその人間を賛美  
 しない。イエスはすべての  
 こと見抜かれ、何が人間の  
 心にあるかを知っていると  
 ある。そして人間を信じな  
 かつたとある。

弱さの中で神の力が現れ  
 る、表される、と言うこと  
 は聖書では一貫している。

アダムとエバも、すばらし  
 いエデンの園を与えられて  
 いたのに、神の命令を守れ  
 ず追放された。その子供の  
 アベルは弟カインを殺した。  
 そのように人間は闇の心を  
 もっている。神が直接善き  
 ものを備えて創造されたの  
 に、感謝しないばかりか、  
 背いていった。その弱さが  
 ある。

ノアの時代も、ノア以外は  
 すべて罪にまみれたとあり、  
 驚かされる。ノアのゆえに、  
 その家族も大洪水から救わ  
 れたと記されている。それ

ほど神に従う生活をしてい  
 たのにもかかわらず、洪水  
 の後、普通の生活になって、  
 ブドウを栽培してきたぶど  
 う酒に酔って、裸となって  
 寝そべっているところを子  
 供たちに見られる、といっ  
 た弱さもそのままに記され  
 ている。

アブラハムも忠実であつた  
 が、他方ではサラに子供が  
 生まれなくて女奴隷ハガル  
 に子供が生まれとき、サラ  
 はハガルをねたんだ。アブ  
 ラハムはサラに不満を突き  
 つけられてハガルと子供を  
 生きていけないような砂漠  
 地帯へと追い出したとあり、  
 アブラハムにそんな人間的  
 弱さがあつたのか、と驚か  
 される。

ヤコブにおいても、イスラ  
 エル民族のもととなった人  
 物であるが、しかし、母親  
 と結託して兄を欺いた。

ダビデも、幼少時から勇気  
 あり、イスラエル軍がどう  
 しても倒すことができなかつ  
 た巨人ゴリアテを石投げ一  
 つで倒したり、後に広大な  
 地域を支配する王となり、  
 しかも詩人であり、豎琴を  
 も弾く音楽家でもあるとい  
 う多才な能力を与えられて  
 いたにもかかわらず、女性  
 に関しての大罪を犯してし  
 まった。しかもその重い罪  
 の重大さに関して、預言者  
 のナタンに厳しく指摘され  
 るまでは気が付かなかつた  
 ほどの弱さがあつた。

このように、キリストの先  
 祖となり、特別に敬われて  
 いたダビデ王に関しても、  
 その弱さをあますところな  
 く記している。

聖書は、いかなる人間をも  
 深い罪をもっているのでは  
 あり、どのような人物をも決  
 して賛美しない、ただ神の

みを賛美するという精神が際立っているところでもある。

ペテロも聖霊を与えられていたが、ユダヤ人からキリスト教に改宗した人達と交わっているうちに、当時のユダヤ人が救いのために不可欠であるとされていたユダヤ人の儀式である割礼を受けていない人を汚れているとして避けるようになっていった。そして使徒パウロから面と向って叱責されるというようなペテロの弱さもありのまま記されている。ペテロは初代のローマ教皇であったと位置づけられるほどの重要人物であるが、聖書は人間すべてがもっている弱さを記している。このように神に直接呼び出されたものであっても、弱さがあった。

た人間の中で神は、神のご計画を進めていき、神の証をさせた。それが人類の歴史であった。

イエスもゲッセマネで苦しみながら祈られた。超人であれば、堂々と十字架を受けそうであるが、徹夜で、血したたるような汗を流して祈った。徹夜で祈るのでなければ、サタンに倒されそうになった。イエスの命がけの祈りであったにも関わらず、弟子たちは眠りかけていた。イエスは十字架など平気だと言うのではなく、苦しまれたのである。そして弟子たちは眠りかけていた。

膨大な人が飢え苦しむ。長い間、どれほどの苦しみがあつたか。とくに悪いこともしていないのに降りかかる多大な苦しみ。

そうした言われない弱き者の苦しみ、それは、弱い一人の人間としてのイエスが、その生涯をおし、またとくに十字架にかけられる前後に示した弱さとともに、全世界に示された。イエスは十字架をになわされて刑場のゴルゴタの丘まで歩まされたが、あまりの疲れに歩みを全うできず、兵士たちが通りがかりの人に代わって十字架を負わせたことも記されている。そしてイエスは、十字架上でも、激しい痛みにもだえつつも、となりに同様に十字架に釘付けられていた重罪人の「あなたを御国に帰るとき私を思いだしてください！」と

の必死の懇願に答えて、「あなたは今日パラダイスにいるのだ」との救いの約束を与えたことが記されている。

そして、あまりの苦しみのために、「わが神、わが神、なぜ私を捨てたのか！」との叫びが発せられたほどであった。これは、著しい困難、苦しみ、衝撃のときには、たとえいかに深い信仰あるキリスト者であっても、こうした人間としての弱さがあふれ出てくる、それがイエスにも如実に現れたのだった。こうして以後二千年間、無数の人が、キリストのために激しい苦しみに遭遇し、耐えがたいなかからの叫びをあげていったが、その源ともなった。

そのような人間の弱さ、苦しみのただ中から、万人の罪のあがない、そして復活

という最大の人類への賜物が与えられる道が生れたのだった。

こうした弱さの中にこそ神の力が現れるーという常識的には考えられないような道を神はとられるのだった。

使徒パウロも、次のように、この真理を述べている。彼は、弱さを常に感じさせるある病気をもつていて、主に繰り返しその癒しを祈った。

しかし、主は次ぎのように言われたのだった。

：すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われたから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇ろう。(\*) (IIコリント

12の9)

(\*) (一)で、「誇る」と訳された言葉の原語は、カウカオマイであり、日本語のように、自慢する、といった意味とは大きく異なるニュアンスをもつていて、それは「喜ぶ」ということの別の強い表現として用いられる。

(二)では、「大いに喜んで(ヘーデオース)、自分の弱さを喜ぶ(カウカオマイ)のだ」と、喜ぶことを二重に別々の言葉で強調しているのである。

日本語の「誇る」は、自分の能力や家系、またスポーツなどでの優勝の回数、母校の有名なこと等々を自慢するということのような意味で使われるのであって、それは自己顕示であり、罪である。

それゆえに、パウロは「弱さを自慢している」などと受けるのは全く間違った理解となる。例えば、「私は苦難をも誇る」(ローマ5の3)と訳されている有名な箇所もこのカウカオマイが使われているが、これは、「喜ぶ」(rejoice)とも訳される言葉であり、そのように訳している聖書も下記のようにいるとある。

・私たちは、患難さえも喜んで

いる。それは、患難が忍耐を生み出し…、(口語訳、新改訳)

• we also rejoice in our sufferings, because we know that suffering produces perseverance; (NIV)

ほかに、同様に、rejoice, exult など喜ぶと訳している英訳もカトリックの代表的英訳聖書である、New Jerusalem Bible (NJB)、NLT、NKJ他多くある)

キリストは、家畜小屋で生れた。ここにも貧しさ、弱さがある。こうした何も権力も武力もない弱さのただなかで生れたものに、神は驚くべき神の子としての力を与えたのであった。

また、ペテロは12弟子の筆頭のような立場であったが、イエスが捕らえられたときには、みな逃げてしまったし、その直後に、女中などから「あなたもあのイエスの仲間だった」と言われて、そうでないと激しく三度も否定したと記されていてこ

こでも人間の弱さがありありと示されている。

しかし、そのような弱いペテロたちにも、それを思い知らされて、イエスの復活のあと主の言葉に従って、仲間たちと真剣に祈りて待ちつづけていたとき、聖霊という牢獄に投げ込まれたという牢獄に投げ込まれたら、殺されることをも甘んじて受けていくという驚くべき力が与えられたのだった。

また、以後のローマ帝国におけるキリスト教の伝達や世界に広がる過程で、ローマでは大競技場でキリスト者たちを野獣に食わせるとか、弱火でじりじりと長時間十字架にかけたまま殺すなど、残酷な刑罰がキリスト教禁止のなかでその迫害の程度には波があつたが、三百年ほどもつづけられた。日本でも、スペインなどの

宣教師の記録した文書に、そうした過酷な拷問の数々が詳しく記されている。

しかし、キリスト者たちは、そのような迫害に武力で反撃、抵抗せずに、その弱さのまま受けて死んでいった。

しかし、彼らは復活し以後の信徒たちをばげます存在となり、キリスト教そのものもその多くが苦しめられ、殺されていくという弱さのただなかで、驚くべき力が与えられて、広大なローマ帝国に広がっていき、それが世界に広がっていくことにもつながった。

ここにも、弱さの中に、神の力が現れるということが歴史の大きな流れのなかで証しされている。

そしてこのような弱さの中に神の力が現れるという真理は、二月に発行した「勝

浦良明文集」の中にも表されている。大学病院の医者

の誤診により三十六年間も人工呼吸器付けて寝たきり、しかも首から下はいっさい動かない、食事も排泄も、起き上がることも、手足を動かすことさえも自分の力で

できない、という拷問のよくな状況に閉じ込められていき、一人の人間と直接に接したなかで、弱さの究極のような状況にあつて、神の力が表されて、そこに生きる喜びや平安をも与えられていたのを身近に知らされてきた。

そして、そのような特別な弱さでなくとも、日常のさまざまな出来事のなかでも、私たちはつねに弱さを痛感させられている。

とくに、老年になると、病気や孤独など、心身の弱さ、また家族の弱さに苦しみ、

悩まされる人達が多数となる。さらに災害、事故、内乱、戦争となるとその苦しみは弱さのゆえに耐えがたいものとなる人達が数知れない。

しかし、そうしたあらゆる人がその生涯において悩まされる弱さのただ中に、神の力ありーこの不思議な言葉、その真理を知らされ、神の力を受けるには、ただ、宇宙万物の創造主である神を信じ、その神様が地上に送りだしたキリストを救い主として信じ、仰ぐだけで足りる。

この一人一人の人間の魂のなかに成就し、さらに広大な帝国にもその真理が実現していったこの真理を聖書は、神の力を込めて刻み込んでいる。

現代のような人間の弱さ、罪深さをいつそう深く世界

的に知らされる状況にあつて、いかなるときにも立ち上がり、前進する力が与えられるこの真理が、だれにでも与えられるようにと願っている。

主よ、御国を来らせてください！

死を前にした人を支えるもの

現在、世界に大きな不安を引き起こしているウクライナにおける戦争は、欧米の巨額の軍事支援によって双方の攻撃がさらに激しくなる様相を呈している。

こうした状況において、何が打ち続く困難にあつて、人間を支えうるのかが重要な問題となる。

戦争となると、いつの時代においても、戦場での兵士

たちは、いつ攻撃を受けて、死ぬかもしれない、また死なずとも砲弾や爆発物、破壊されたものなどの破片や剣：等々によって、重い傷を負い、重度の障がい者、あるいは病人状態となり、生涯苦しまねばならない人が多数生み出される。

ウクライナのために戦うのだという勇ましいことを言う兵士たちもいるであろうが、彼らがじっさいにそのような重い傷を負って以後の長い生涯を病気や障がいを負って生きていくとき、いかに重苦しい人生となることであろう。

しかし、若くて健康なときにおいては、そうした病気や障がいを負いつつ生きるということがいかに苦しいものか分からないし、自宅や病院での養生、あるいは仕事もできなくなった身で、周囲

からの冷たい目と戦いつつ、何十年も生きることがどんなに苦しいことか、若い兵士たちには到底理解できないと思われる。

また、愛する息子を、そのようになる可能性を深く憂えつつ、ロシア兵と戦え、という大統領、政府や軍部などの命令によって、送り出し、その結果、そのように息子が死んだり、重い傷を負って帰ったとき、その家族たちの悲しみや苦しみはいかばかりであろう。

戦争という大量の殺傷を伴う事態においては、こうした数しれぬ人々の悲劇が、一時的でなくずっと何十年と続いていくという事態が大量に生み出される。

戦時の困難だけでなく、その後もそのような、人の話題にのらないような形で、深い傷痕を残しつつづけてい

く。

戦争が長引くほど、そのような重苦しい事態が現在から将来の長い期間にわたって続いていくことになる。

そのような状況にあつて、何が人間を支え、なおも希望を与えることができるのか、それがとくに重要な課題となる。

そうした場合、じっさいに戦地にあつて、死を目前にしつつ、何を見つめていたのかを知ることは、現代においてそうした戦いに送り出された人だけでなく、この国の人にとつても重要なことである。

なぜなら、そのような死あるいは、重傷を負うという状況が目前にありつつも、そこで力が与えられるなら、それこそが真理の力であり、平時のだれにでもあてはまることが出来るからであ

る。

整えられた自室で安全に過ごしている者が、いろいろとそうした生死の危険を直前にした人々に何を言うことができようか。

以下に掲げる手紙の一部の内容は、6年ほど前に「いのちの水」誌に掲載したが、現在のような特別な状況において繰り返し読み直すことの必要性を感じるので、再度次に引用する。

これらの手紙は、「ドイツ戦没学生の手紙」(\*)から引用した。ドイツ語原書は、2万2千通以上の手紙が収集され、それらのなかから選ばれて出版されたもの。

この手紙の収集に関しては、「戦死者の大学や教授、友人たちからの貴重な援助、とりわけ、ヘルムート・ティールケ教授に感謝する」と書かれている。

テイーリケは、ヒトラーの率いるナチスによつて教授職を追われ、迫害は続き、講演や移動を禁じられたが屈せず、熾烈な空爆下にあつて説教や講演を続けた。

戦後、ハンブルグ大学学長、テュービンゲン大学総長にも選ばれた。そして、総長会議の議長もつとめていたときその立場からこの戦没学生の手紙の重要性のゆえに、その収集を広く呼びかけ、戦争の悲劇を生きた証言をまとめることによつて、歴史に刻み込もうとした。

(\*) 「ドイツ戦没学生の手紙」一九五四年 高橋健二訳 新潮社発行

ドイツ戦没学生の手紙から

：私はいっさいの人間的なものを見る冷静な目を、だ

が、その人間的なところから人間を高めるものを見る目をも、失わないでいたい。

しかし、いずれにせよ、私は恐れを和らげてくれる最後の力を知っている。

大きな彫像のように、聖書の言葉が心に浮かんでくる。今、それがかつて思いもよらなかつたほどに意義深いものとなつて現れてくる。「陰府(\*)に身を横たえようとも、

見よ、あなたはそこにいます」(旧約聖書 詩編・一三九・8

心静めている厳肅な時に、私は周囲の友にこの言葉を言い、さらにつぎの別の言葉を添えた。

「しかし、私はつねにあなたと共にある。」(詩編七三・23)

(「ドイツ戦没学生の手紙」108頁

(\*) 陰府とは、旧約聖書で、死者が行くとされていた所で、地下にあり、闇にあるとされていた。旧約聖書には後期に書かれたもの以外には、復活するという信仰はまだなかった。

○これは、第二次世界大戦において、ヒトラー支配のドイツとソ連との戦争のときドイツ兵として戦場に向かい、捕虜となつて衰弱していくなかで妻に宛てて書いた手紙である。この一年後に死亡。戦後になつて帰還兵によつて妻のもとに届けられた。

この兵士は従軍した医者であつた。自分の最期が近づいてくる深い闇と絶望的な状況にあつても、不動の彫像のように浮かび上がってくるもの、それが聖書の言葉であつた。

ほかの一切がもはや頼りにならないとき、そのような時にいっそう眼前に揺れ動

くことなきものとして見えなくなるのが神の言葉なのである。

死においても、どのような状況に置かれようとも、神は私たちと共にいて下さるといふ確信がそこから再び強められる。

次に引用するのは、戦うことを余儀なくされた若きドイツ兵士が、子どもたちにあてた手紙である。

書いた人はヨアヒム・ベネス。ハイデルベルク大学の語学講師。一九〇六年生まれ。一九四四年三月六日に戦死。ここにあげた手紙を子供たちに書き残して、1週間あまり後に戦死したことだから、この手紙はいよいよ死のときが近づいていくことを実感しつつ書き残したのがうかがえる。

一九四四年二月二十五日、

神がわたしをおまえたからあまりにも早く引き離すことを覚悟しなければならぬような時代に、私たちは生きています。だがそれは目にみえる体のことで、霊的にはそうではない。わたしの愛はいつも・おまえたちみんなのそばを離れない。私たちは再び会うことができる。

今はまだお前たちはごく小さいので、私のことばを理解することができないだろう。

だが、いつもいつも私の心の近くにいるおまえたちに対して、自分の目に起ころうとして、自分の目について黙っていいだろうか。

キリスト教のことを大切に、学び、愛すること、それにしたがって生きるようにつとめなさい。キリスト

教の本質に深く入るためには、絶えずそのようにする努力が必要である。

私たちが生きていくうえで、このことは群を抜いて大切なことだと私は信じている。

お前たちが、信仰にしたがって生きるように絶えず努めるならば、そのときお前たちはしだいに信仰の果実を知ることになる。

すなわち、真理、魂の自由、平和と喜びなどである。これらはこの世のものではないのだ。

自然から学びなさい！  
自然の中にこそ、神の意志は、人間の歴史の中よりも大きな文字で現れているからである。森や野、山や海

に対する本当の関係を、歩くことによつて獲得しなさい。

夜でもときどき、さえぎら

れることのない夜空の下に、起きていることをすすめるよ。動物や植物に親しみなさい！

お前たちの生活において、決して表面的な利害を第一にしないようにしなさい。

「人間は、神を深く知り、愛し、神に仕え、それによつて天国に導かれるために地上に存在するのだ」私たちのキリスト教のこの教えこそ、お前たちにとつて導きの原理とならねばならない。

世界は滅びる。しかし、神と私たちの魂は残る。神様に向つて手を差し伸べ、つねに神様に向つて成長していかねばならない。お前たちの幸いはそれにかかつている。

とりわけ、人間を欺いてその平安と真の人生の価値を奪い取ってしまった、金銭を追い求めないようにしなさい。

い。貧しくとも、満足している幸いな人を、私はたくさん見てきた。私がお前たちに残すものは、金銭以上の値打ちがある。私は絶えずはたらいだが、お金儲けということはついぞ考えなかった。

私は貧しさをいつも私に忠実だった良い友たちとしてお前たちに推薦する。

いとしい私の子供たちよ！  
忍耐つよくあるように！  
あらゆる不自由、不正、軽蔑を受けることなどを耐え忍ぶ鍛練をしなさい。なぜなら世界はそういうもので満ちているのだから。

そうしたこの世の不完全性が私たちを育てる母であり、さまざまの苦しみが私たちを強くする日々の食物なのである。

苦しみ、困難、悲しみ、憂い：それらを抱きしめて、

甘んじて耐えていきなさい。救い主イエスを見上げなさい。

神はこのうえなく愛の御方！私はいままで、百度も、千度もそのことを経験してきました。神をたたえ、感謝をささげよう！

（「ドイツ戦没学生の手紙」124頁。新潮社1953年 高橋健二訳）

現在のウクライナとロシアでの戦争の時、そのような命の危機の迫る状況において、兵士たちはどのようなことが心に浮かび、何を考えているであろう。

そもそも、キエフ（キーウ）は、ロシア正教会の起源地であり、そこに今から千年ほど昔に建てられた大聖堂は、世界遺産とされている。（\*）

多くの日本人は、全体とし

てキリスト教のことを知らない人が圧倒的に多いため、ウクライナというと広大なロシアの南方の一部の地方、せいぜい地理で学ぶように小麦の重要な産地と受け止めるだけで、ロシアのキリスト教（ロシア正教会）の基となつた重要な地であることを知らないと思われる。

（\*）954年には、オリガという女性がキリスト者となり、その孫が、キエフ大公ウラジーミル1世となった。彼は988年にキリスト者となつて、以後広大なロシアにキリスト教が広がっていく出発点となった。

こうした背景のあるキエフ（キーウ）において、報道はされないが、多くのキリスト者たちが、やはり今回の不条理、悲劇のなから、必死で神に祈り、すがっている状況を想像することが

できる。

戦争という、人間を殺傷し、長年住んできた建物をも情け容赦なく破壊していくことが当たり前のようにおこなわれる状況にあつて、そのような武器を取つての争いや、ニュース画面では、その残酷な破壊や被害者の惨状、悲しみや苦しみの状況だけが報道され、そのようなかで何が人間の存在を支えることができるのか、については、神への祈りと力が与えられている人達などは、全く報道はない。

しかし、ここに引用したように、そのような闇と死の迫る状況にあつてもなお、いやだからこそ、死の彼方の永遠の光を凝視する人達もまた、起こされていると信じていることができるし、一層そうした人達の信仰が強められ、悲惨、困難のなか

で、彼らが神の力によつて支えられるようにとねがつてやまない。

主日礼拝（オンライン）での5分間メッセージと自己紹介から

対馬秀夫（青森）

見ないで信ずる信仰について話したいと思います。

ヨハネ福音書20章29節「イエスはトマスに言われた。私を見たので信じたのか。見ないで信ずる人はさいわいである。」

2コリント書5章7節「目に見えないものによらず信仰によつて歩む。」

さて春期四国聖書集会、また「祈りの友合同集会」、「祈りの友通信」、「野の花」文集等々の様々な人の証しや感話を聞いて思うこ

とがあります。

人みんなそれぞれの形において、ある時に神から強く特別な霊的な経験を与えられているという思いです。

その霊的な経験、強くその人に働きかけられた事柄。それを今、神から与えられたしるしとして、まず言い直してみます。

私にもまた、そのようなしるしがほぼ6年ほど前、与えられました。しるしは与えられた当初はやはり、一種の精神的な高揚状態になっていました。

前へ飛び出して大きな失敗もしましたけれども、この外に向かう気持ち、また他者に対して心を開いて向かう気持ちは強く積極的だったように感じます。

月日が経つてくると、そういう高揚した精神状態というものは、当然おさまって

るわけです。すると、この次第に落ち着いた気持ちにはなっているのですが、この外に向かつていくまた他者に対して、積極的に向かって心を開いていくというところが、どこか抑えのブレーキが自分にかかるのかというような感じになってきたことを、やはり思っています。

さて、2020年の5月から、徳島聖書キリスト集会のスカイプ集会員として主日の礼拝、夕拝、家庭集會に参加し続けました。

そこで学んだことがたくさんありますけれども、その中で今は特に2つのこと。「復活の信仰」と「父を仰ぎ見よ。また立ち帰れ」と言うことですが、そのことを強くあらためてはつきりと知らされます。

救いの道は誰にでもわかる

単純な事。しかし、意外にその道は曖昧にされてしまったりするのである。主日礼拝の度ごとにそれを教えられることに学ばされます。イザヤ書では

「地の果ての全ての人々よ。私を仰いで、救いを得よ。私は神、ほかにはいない」

(45章22節)

ローマ書では

「福音には神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」(1章17節)とあります。

この信仰義認の言葉は、この「見ずして信ずる。」信仰というのを含んでいると私は感じています。以上です。

いままでの歩みから

大澤恵美子(北海道・苫小牧)

私は先々のことを思っただけ、低い方向に考えるのではなく、低い方向に考えていく自分、そして思い煩いばかりで前へ進めない自分、「主の御名を賛美します」と言っている自分が本当なのか考えてしまっている自分でした。

2020年8月の末より、吉村様の御愛労で徳島聖書キリスト集會の主日礼拝に参加させていただいております。

初めはスマホで、現在はスカイプで参加させて頂いております。

吉村様の講話、参加者の方々の感話、そして徳島聖書キリスト集會のお世話していただいている方々との交流の中、札幌聖書集會の大塚



様との交流の中からも主の愛を感じさせて頂き、聖霊によっての喜びがどんなに大切なことか。私は愛されていくということが感じられて感謝の毎日です。

本当にありがとうございます。これからも主の愛をいっぱいいっぱい受け取って生活していきたいと思っております。ありがとうございます。以上です。

北川玲子 (北海道・苫小牧)

苫小牧聖書集会の北川玲子です。現在一人住まいの83歳です。

私が聖書を学び始めたのは結婚後の30歳の時でした。

羽仁もと子さんの友の会の「思想しつっつ生活しつっつ祈りつっつ」、キリスト教精神に基づいて自由協力愛による社会の建設をめざす会に

入会した時に、無教会の船澤澄子さんに出会って、苫小牧聖書集会に入会しました。

いろんな事情で休むことも多く、あまり理解できないまま過ごしておりました。その他、堤道雄先生に学び、のちに横浜集会のお話をテープに録って流してくださり、長い間聞いていました。

また、札幌聖書集会の人々とも交流をしていただき、ライムギ先生ご夫妻や大塚さんご夫妻など随分お世話に頂きました。

2008年ごろより吉村先生が北海道にいらした時、札幌交流集会に参加していただきました。

のちには、苫小牧も高齢者が多くなり、札幌市まで出かけて交流集会に参加するのが難しくなり、吉村先生に苫小牧に来ていただきま

して、直々講義を受けておりました。

今はコロナウイルスに見舞われ、苫小牧聖書集会も大澤さんと北川で、このスマホを使って聞いており、み言葉を学んでおります。今後は是非学ばせて頂きたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。終わります。

お知らせ

○コロナのために、オンライン集会としてきましたが、5月15日(日)の主日礼拝から、徳島市の田宮の集会場にての集会を再開します。スカイプを用いるオンラインも併用します。

○勝浦 良明文集、「沙漠にサフランの花咲く」、また、

若井克子さん著の「東大教授、若年性アルツハイマーになる」(講談社)などの本の注文が続いてあります。追加も印刷し、また購入していただきますので、希望の方は申込んでいただければお送りできます。

若井さんの本の追加注文をまとめて講談社の担当者へ電話したところ、また在庫なくなっているとのこと、5月20日ころに再版ができるのと、とで、印刷をしても次々に売れていくと講談社の担当の方と話していただきました。

アルツハイマー以外にも認知症になる方が多数となりつつあり、関心が高いこと、東大教授であって脳外科の専門医が罹患したこと、そしてそれを公表し、ご夫妻で可能なときまで、各地を訪れ講演などされてこの病気のこと、介護での体験をキリスト者としての心をもって書かれていることなども多くよまれている理由になっっているようです。

○コロナはいつになつたら終息するか分からないなかで、持病のある方々は自宅での時間が今後とも多くなると思われます。

私たちの徳島聖書キリスト集会では、数十年前から、主日礼拝と夕拝の録音、一部の家庭集会の録音CDを希望者に送付しています。

祈り、賛美、聖書講話、感話などもおさめていますので、健康な方と共に病気などで自宅療養の方々などからも以前から希望あつてお送りしています。

最初はカセットテープでの録音、送付でしたが、かなり以前から、MP3対応のCDプレーヤ、またはパソコンで聞くことのできるCDでの作成と送付となっております。

一枚のCDで主日礼拝4〜5回分と夕拝2回、家庭集会2回の合計 8〜9回分の集会の録音で、一回二時間として、8〜10時間分の録音です。

毎月の第一週に前月の録音CDを発送しています。

費用は、一か月分の一枚のCDが500円(送料込)、半年または一年をまとめて送金でも可です。左記の郵便振替でお送りできます。

それを聴くためのMP3対応プレーヤは、大型電気店でも置いてないこともあり、近くにそうした電器店がないとか、パソコンも持っていない方でそのMP3対応のCDプレーヤをご希望の方には、従来から私がインターネットで注文して発送するということでお届けしてきました。

価格はインターネットの店なので変動がかなりありますが、1万円前後です。

それはラジオ機能もあり、CDラジオという名前での製品もあります。しかし、CDラジオといってもMP3

対応でないのが多いので、近くの店で購入される場合には、MP3対応かどうかを必ず確認しておくことが必要です。以前にも間違つて購入してしまつたという方が複数あつたのでよくに記しておきます。

私自身も、夜に途中で目覚めて眠れないときには、その録音を聞き直していると自然に眠っているということもあります、去年の入院中も苦しくて眠れないときには、その集会の礼拝録音CDや、イザヤ書、使徒言行録などの徳島聖書キリスト集会の聖書講話録音CD(すべてMP3版)を聞いて痛みを耐えたこと、また眠れるようになったことを思い出します。

★スマホでは下のQRコードで。

集会案内  
主日礼拝：5月15日(日)  
から徳島市南田宮の徳島聖書キ

リスト集会場にて、午前10時半〜12時  
・以下はオンライン集会  
○夕拝：毎月第一、第三火曜日の夜7時半〜9時  
家庭集会  
○北島集会：戸川宅 毎月第四火曜日の午後1時〜2時半。  
問い合わせは 吉村または、戸川恭子さんまで。戸川さんのE-mail:charis7@noui.ne.jp

○海陽集会：毎月第二火曜日 午前10時〜12時  
問い合わせは数度 勝茂さん。kadoshks7@mb.pikara.ne.jp  
○天宝宝集会：毎月第二金曜日 夜8時〜9時半。天宝宝 綱野悦子宅。

編著者・発行人 吉村孝雄(徳島聖書キリスト集会代表) 〒七七三〇〇一五 小松島市中田町字西山九一の一四 携帯電話 080-6284-3712 固定 0885-32-3017 (FAX共) E-mail: emuna@oce.ocn.ne.jp ○この冊子は、読者の方々からの自由協力費で作成しています。協力費をお送りくださる場合には、次の郵便振替口座を用いるか、千円以下の場合には切手でも結構です。  
郵便振替 口座番号 01630-5-55904 加入者名 徳島聖書キリスト集会 ○http://pistis.jp (「徳島聖書キリスト集会」で検索)

